

和漢

朗詠國字抄

七八



和漢朗詠集抄

雜

閑居

獨東都の履道里に閑居泰適之雙有と我記すのまわす不亦皇唐大和の歳理世安樂之音有と我知今

和漢朗詠集抄卷之七

雜

閑居

閑居

不獨記東都履道里有閑居泰適之雙亦今知皇唐大和歳有理世安樂之音

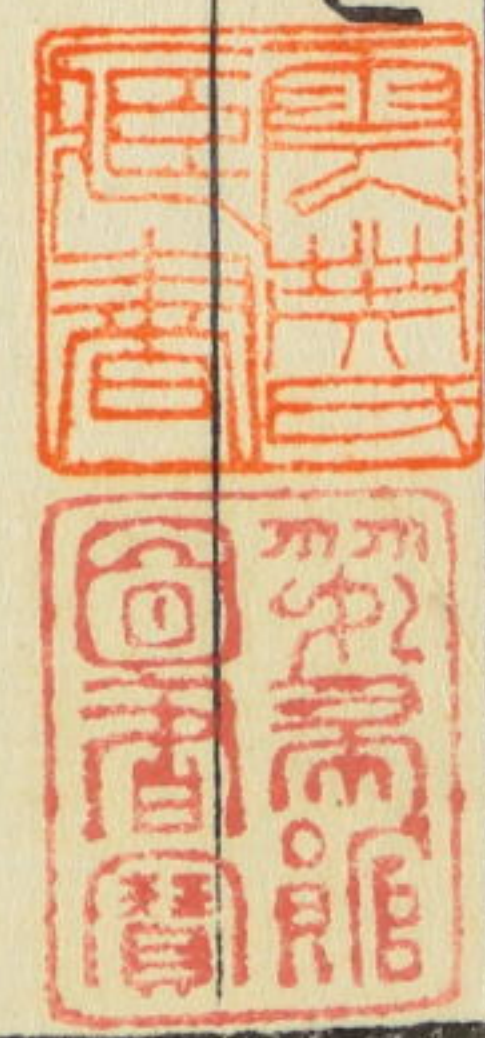
洛中詩の序東都洛陽城履道里白氏の住處の地谷泰適雙自我云皇唐大唐と云と大和十四主文宗の年號理世の意安樂之音あると毛詩の序治世之音安樂其政和と我身かくあるなりわの治世の安樂故人の意

和漢朗詠集抄

卷之七

雜

七



宮車一こま去い樓臺之十二十二長長空空隙隙駟駟追追難難綺綺羅羅之三千三千暗暗老老たり

鶴籠開處鶴籠開處君子君子書卷展時書卷展時逢逢故人故人に逢逢

人間人間榮耀榮耀は因緣因緣淺淺林下林下の幽閑幽閑氣味氣味深深

官途官途自此自此心長心長別別世事世事今從今從口不言口不言

幽思幽思不窮不窮深巷深巷無人無人之處之處愁腸愁腸欲斷欲斷胸斷胸斷と欲閑欲閑窓窓有月有月之時之時

蕙帶蕙帶蘿衣蘿衣簪簪於北山於北山之北之北於於抽抽檝檝於東海於東海之東之東於於鼓鼓

宮車一こま去い樓臺之十二十二長長空空隙隙駟駟難難綺綺羅羅之三千三千暗暗老老

追綺羅之三千暗老追綺羅之三千暗老張讀張讀

鶴籠開處見君子鶴籠開處見君子書卷展時逢故人書卷展時逢故人

人間榮耀因緣淺人間榮耀因緣淺林下幽閑氣味深林下幽閑氣味深

官途自此心長別官途自此心長別世事從今口不言世事從今口不言

幽思不窮深巷無人幽思不窮深巷無人之處愁腸欲斷之處愁腸欲斷

閑窓有月之時閑窓有月之時

蕙帶蘿衣抽簪於北山蕙帶蘿衣抽簪於北山之北之北蘭橈蘭橈桂桂

都府樓繞看瓦色觀音寺只聽鐘聲

晦跡未拋苦徑月避喧猶卧竹窓風

陶門跡絶春朝雨燕寢色衰秋夜の霜

眺望 風翻白浪花千片雁點青天字一行

明永國字少

功曹と云司にせんとかある時の強で司が... 北山の北道と云故事建康府上元縣に北山あり今てふはびり... 上の開處し心ぞ隠逸の句也蘭の標桂の截と花や... 心いわげ白ひある樹香ある草を出せの... 楚辭に桂の權蘭の漿漁父が舫を鼓てうむとある... 東に世捨れり故事... 其後東坡が赤壁の賦此句... 都府樓繞看瓦色觀音寺只聽鐘聲

晦跡未拋苦徑月避喧猶卧竹窓風 伯樂天が香炉峯の雪の詩意に... 山林に跡は晦せも苔の徑に月の明る... 門は出ずる筈居る懸へ都府... 管の... 音寺天智天皇の御祈願... 其寺の鐘の聲の... 晦跡未拋苦徑月避喧猶卧竹窓風

陶門跡絶春朝雨燕寢色衰秋夜の霜 開居... 門に人跡も絶春雨の比日... 霜... 我ど... 戀の歌... つねに問來ず草むひまげりあまらる...

眺望 風翻白浪花千片雁點青天字一行 風の... 花千片雁點青天字一行

明永國字少

新

二

紫闥出而東  
望山岳半は雲  
根之暗に挿り  
嶺踏而西顧  
家郷ハ悉煙樹  
之深に没す

天台山之高巖  
見也ハ四十五尺の  
浪白長安城之遠  
樹望ハ百千萬  
莖の薺青

一片二片と云義なり

出紫闥而東望山岳半挿雲根之暗

踏翠嶺而西顧家郷悉没煙樹之深

紫闥出而東望山岳半挿雲根之暗

家郷悉没煙樹之深

見天台山之高巖四十五尺浪白望

長安城之遠樹百千萬莖薺青

唐の天台山、洛陽西京、風朔南京、江陵北京、太原中京、長安  
都東京、洛陽西京、風朔南京、江陵北京、太原中京、長安  
日本、東國、異邦の名、都洛陽、又中京の意、以て  
長安城とも云、顏氏家訓に遠く樹望ハ薺青の莖とあり

江霞隔浦人煙遠湖水連天雁點遙

一行斜雁雲端滅二月餘花野外飛

老眼易迷殘雨裏春情難繫夕陽前

花盛に都城ありて、花紅柳緑に揺雜て錦織うけること  
と山の眺よりおこりて京城をめぐりて文字に記されて、混にる意

江霞隔浦人煙遠  
湖水連天雁點遙

一行斜雁は雲  
端に滅二月の餘  
花野外に飛

老眼迷易殘雨  
の裏春情難繫  
夕陽の前

君與後會何處  
朝一盃盡

前途程遠思於  
雁山之暮雲  
於馳後會期遙  
曉の涙に因る

餞別

餞酒食之和訓  
己別を惜酒食す  
馬の鼻は行路  
何處かて此後會  
も知るる酒は  
酒は動かし

與君後會知何處為我今朝盡一盃

前途程遠馳思於雁山之暮雲後會

期遙露纓於鴻臚之曉淚

朱雀羅城門の傍に鴻臚館あり異國の人  
朝も夕も舎す館に海の周文德唐使とて來還る餞別の序  
前途程遠馳思於雁山之暮雲後會期遙露纓於鴻臚之曉淚  
馳了雲望望してわんと都より胡地の道小門山あり山高  
くして胡國歸るの越えつゝふれ通はんとて峯を攀ひて  
谷づ後の糸會期もまよふこれ落涙おそく冠の纓を  
朝網の三位に至るといふ未かな人云日本才徳用る國と

昔丹鳥聚於  
寸陰於十五年之間今

促畫熊欲分手於三百盃之後

昔丹鳥聚於  
寸陰於十五年之間  
熊を促て手は三  
百盃之後因る  
と欲

錢の詩の序丹鳥の飛義は螢の如く  
西子負して文を好む蜂は聚て囊に盛其光少て書は博  
士に至り寸陰は競ハ一寸の陰は惜みて學問す夏禹  
王寸陰惜むやと春秋別傳に齊越三十歳まで農業は  
つとめいかに此苦免んといふ人のいふ三十年學免ん  
ども年關は學と得るらん齊越いといふ人の食は  
食し人の寢を吾の寢一食を忘るる日いつて十五年  
十年に當ると寢食を忘るる學び七年かして六箇國の刺史  
酒持とあり後周の武王の師とあり下の句は如く  
受領に至る云畫熊は熊軾とて受領の車の前の板に熊  
畫非禮はかざる豊は鄭玄刺史とあり下は百人の分  
子酒は携來りて勸む人毎に三盃をけ飲て醉はるとあり  
手は分つる人に今  
別るるを

揚岐路滑。我之送人。多年。李門波高。人之送我。送。何の日ぞ。

萬里東に來何の再日。一生西望。是長襟。

九枝燈盡。唯曉。一葉舟飛。秋待不。

浮世期後會。還石火の風。向。敲。悲。

揚岐路滑。我之送人。多年。李門波高。人之送我。何日。江以言。

別路に花飛白と云詩の序此句は作者學者か登庸の述懐やうき揚と李氏もさうさすめ訓と云ふ題の花より揚朱と云人岐路はんと南行く北へ行く道の古くとも泣くも淮南子の出入の南北別行岐あまび踏滑今何日かおんと云心後漢書に李膺字元禮學問名高其此の士此人に接するものあり登龍門と名づくあり魚が龍門の滝を登るいものと故事も用らるるに本門波高と萬里東來何再日。一生西望是長襟。野相公。或人いこ此句は詩の本體と。

九枝燈盡唯期曉。一葉舟飛不待秋。

渤海の使を送る時の夜深燈尽のまは曉待ちて。行と開元遺事韓夫人五枝燈樹置とわらふ。と枝九つある燈臺。下の句成て上の句得る。朝綱卿の云。九枝燈以て作。一葉舟と前巻に出る。

欲以浮世期後會。還悲石火向風敲。

後撰。ちとひやるんぐらうらさし。山遠く雲行客の跡埋す心。

身こそへそ居とも我まふ心。雲ふもさくら思ひ。雲のまろ雲何。山遠く雲行客の跡埋す心。

家集  
三月終り四月來んとする年毎の春の別れの哀なる旅行人の心  
こころのなきしつらさばわをまじりてささく人ぞあつる

三月終り四月來んとする年毎の春の別れの哀なる旅行人の心  
こころのなきしつらさばわをまじりてささく人ぞあつる  
こころのなきしつらさばわをまじりてささく人ぞあつる  
こころのなきしつらさばわをまじりてささく人ぞあつる

右近衛少将参議源朝野が息際實が筑紫湯谷に生るる  
作者白女ハ源造が女として江口の遊女ハ山崎よして別れわさし  
こころのなきしつらさばわをまじりてささく人ぞあつる

心又いふ夕夜せぬ世も此時を別れざるらんよるむ意  
いものなきしつらさばわをまじりてささく人ぞあつる

行旅

孤館宿時風帶雨遠帆歸處水連雲

李謝の送別詩孤館に旅寢て風雨をひく海と天と  
合るじつ限るは沖遠く帆の走るこころ

行行重行行明月峽之曉色不盡渺

渺復渺渺長風浦之暮聲猶深 源順

前の餞別の昔聚丹鳥と云句同序文之行々重行々  
く行意明月峽ハ山水の詩の叙句に渺々ハ遠く白長風

浦ハ地名江水の東韮春縣の南にあり水經に出長風と  
云地々暮の風の聲猶深く止ざる意明月峽ハ曉も月光尽す作

曉入長松之洞岩泉咽兮嶺猿吟夜

宿極浦之波青嵐吹兮皓月冷藤爲雅

寫雅周防守めて下る時室の津にて作と云長松ハ陰高  
松岩泉ハ岩間より落滝し嶺猿吟ずるハ叫極浦ハ遠く

皓ハちろなる浦と云意青嵐ハ晴嵐ハ白也晴て風吹く  
皓ハちろなる浦と云意青嵐ハ晴嵐ハ白也晴て風吹く

渡口郵船風定出波頭謫處日晴春

行行重行行明月峽之曉色不盡渺  
渺復渺渺長風浦之暮聲猶深

曉入長松之洞岩泉咽兮嶺猿吟夜

宿極浦之波青嵐吹兮皓月冷藤爲雅

之波に宿をまは  
青嵐吹て兮皓  
月冷

渡口の郵船ハ風

孤館に宿時風雨  
遠帆歸處  
水雲に連



定て出波頭の諫  
處ハ日晴て春

洲蘆の夜の雨他  
郷の涙岸柳の秋  
の風遠塞の情

蒼波道遠して  
雲千里白霧山  
深くて鳥一聲

篁隱岐國へ流る時之作の渡の口の郵船風の定る波野相公  
まて漕出に郵馬歌詠處流る國へ諫せしむと詠ず吾行  
へて配所と思ふあつる波頭に日の晴るる  
春の心あたまこころ平

洲蘆夜雨他郷涙岸柳秋風遠塞情

旅の泊の意は作る爾雅に水中の居は洲と云とあり海中の直幹  
砂水にゆりまらま陸とある洲先に生るる芦の葉に夜雨の  
音て哀なるに浮寝の袖をるる他郷は自國をらま來て尋  
郷へ岸の柳に秋風の吹て遠は胡國の地ハ柳多しと云哉  
あつる遠塞は或る人の情又さぞあつると  
旅の身より遠くかこひやむらり

蒼波路遠雲千里白霧山深鳥一聲

江石山寺小詠て作湖城眺望蒼波路遠く千里の直幹  
雲につるる下の句は案煩つ陸奥下るに足柄山まで考至  
具しる女道遠く雲井るる深山路にまるとも聞ぬ鳥の  
聲しれと口号るるかぞやと下の句は霧深山路に鳥の聲する

作しとぞ

やのぐと明るれ浦の朝霧に漕ぎももく船を思ふ

天明と夜の明行空のおちりかてさるるぬえのくと明る朝  
石の浦の朝霧に漕出する舟の嶋をま行が今いづる行  
らんとかが波より哀に思ふと此哥人丸第一の詠を諸説  
區々する公任卿を九品はるるもた上品上じま嶋と冬  
双子嶋鞍掛嶋

亭  
こつれとつる十嶋のまてさだあつる人つらびは海士の泊る

隱岐國に流さるる時船に乘出立とて京るる人のつらびは  
る和田の原ハ海の惣名八十嶋の多の嶋へ人ハ告よ京る  
人球さるるあつる釣舟かんへる處のものかえつる意あつ  
流人への釣舟の賤ふ言はあつて七と云ハ非の仁明帝の御時  
承和五年遣唐使の命を時正使第一の船風波が損  
第一の望の舟とくんと堅く争て肯せは勅詔をむく

其後勅免ありたり

たよりあはれいそむつげらんるる河の雲のよえぬと 兼登

昔に聞のそむるるに思ひし白河の關はるるを越すと都告

城とて解すまゝとれど

庚申

此夜癘をば三月九日癘災はすと言書に

命兒子常遊子命兒子と唱をば其思難

命兒子常遊子命兒子と唱をば其思難

年長毎勞推甲子夜寒初共守庚申

三體詩か出絳縣の老人年長問也甲子夜以答

己酉年終て冬の  
日少庚申夜  
半少く暁の光  
遅

己酉年終て冬の日少庚申夜半暁の光遅

仁和二年菅公讃岐守任国うて寛平元己酉年の御作之其官

年未だらる日數とらふ成さるる今宵庚申の夜は冬

は猶長くて明くぬると

いそむるはかしくもて狩も漁も獵のるるは獲と云ふ文字濁て

いそむるはかしくもて狩も漁も獵のるるは獲と云ふ文字濁て

のえさなはかしくもて戀歌いさるる中の中の去るるせんるるあや

帝王付法皇

徳天地に配してハム位に私セざる帝王

漢高三尺之劍  
坐制諸侯  
張良一卷之書  
立登師傳

漢高三尺之劍。坐制諸侯。張良一卷之書。立登師傳。

後漢書文

項莊之鳴門  
會情於一座

項莊之會鴻門。寄情於一座之客。漢

祖之歸沛郡。傷思於四方之風。

同前

之客於寄漢  
祖之沛郡歸  
思於四方之風  
於傷心

一説に藤の稚林後漢書成て書る文と云 項莊ハ項羽の季父一座の客ハ漢の高祖ハ鴻門の會に劍拔て舞ハ高祖成討ん情なりも事成ハ高祖乱成治め古沛郡に歸り酒成置て邑の父老成招り宴會せし此上ハ賢士成得て四方成平小沛ハ思成傷ると楚の項羽沛公高祖成鴻門に招り酒成成さし成竊殺んとす時に項莊劍成拔て舞張良成て項伯親張良門外に出樊噲成呼喚入んとするに門成堅くて入らず成軍門成倒入て幕成排立髮逆に立眼成怒ハは成死成裂り項羽成退成入て勇士と酒成勸む噲成我死成劍成拔て切食ふ此内に沛公座成立て衣服成くひそらよ道之り多其後楚王項羽成亡天下成定む下の句に漢祖と云も高祖ハ默布成討て故郷沛成歸歌ていそ大風起兮雲飛揚威加海内兮歸故郷安得猛士兮守四方風を自ら成らぬと云成乱に成る四方之風と作る文成本なり

四海の安危。掌内の照百王の理亂。心中の懸

幸に堯舜無為の化に逢て。犧皇向上の人と作て。得たり

聖皇自在長生殿。在る蓬萊王母が家に向て

仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。作瀨と作之聲。寂寂として口閉。沙長として巖と為。之頌洋洋。目に見満

明永國を少

四海の安危、照掌の内、百王の理亂、心中の懸

照すてを「さ」は朝廷の爲に（照）昔唐の太宗の時魏徴と云智臣が鑑として古今をうけつて帝の鏡とするるも百鍊の鏡を用いて足らず東夷南蠻北狄西戎の四海迄安も危も百王の理も乱も皆掌の内照し、心中の鏡懸し「さ」は「さ」は閣下と云く白文集成は照は居る

幸逢堯舜無為の化、得作犧皇向上の人、我身太宗の明主の時逢て悦み唐堯舜上古の聖主、行する天下の民善道にうつた無為の化、氏此帝八卦の画九州の書契、造て繩の結の政に之を明王へ向上する言て今、聖代に逢て上古は犧皇の世の人のい、寧く静る身とす、るよとと、太宗皇帝が讚と願

聖皇自在長生殿、不向蓬萊王母家

帝の徳が賛、山宮の模、長生殿と云帝の居處、此壽命長久の殿に在る蓬萊山に向ひ西王母が不老不死の家、尋るに、ちよとぬと

仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰、淵變作瀨之聲、寂寂閉口、沙長爲巖、之頌洋洋、目に見満、紀淑望

延喜の御時躬恒貫之忠岑友則四人に古今和歌集を撰、その中貫之規模の人として自ら仮名序を書き又其紀綱言長谷雄卿書のと云此句延喜の帝がゆめ奉る云仁帝の仁徳、西の頭東の尾、南の北、宣ひ、日本紀より

卷之七

陸

二

静鈴和名を云秋津虫と云洲ハ国と云義其外までも仁  
 流と云と云洲と云う流と云を筑波山ハ常陸のありて  
 茂れ山也帝の恵彼山より茂れと云陰と云ハ筑波根のこのも  
 かのものうげハあると云あるは思ふ夜名序にあるをいん  
 りとくその波やまの外まをさひらたちやんめぐこのうげつ  
 かやまの麓よりをまぐくと書るは横より淵變じて瀬と作  
 世の中ハ何う常なるもさう作らぬのふちぞは瀬と作ると云  
 成取ハ我君の御代ハ常盤のまゆせハ淵瀬なる歌の聲ハ  
 かく寂しく口は閉て響ずさしづらぬものいぬ意成寂々と  
 置る砂長じて巖の君が代ハ千代に千代をこも石の  
 りとわとらうてさびのむもさぞと云歌成取頃ハいひうと洋々  
 ハ美盛ハ今くる無為のせり石の巖とらるいひ歌のそ耳  
 にまて聞ゆると論語に洋々乎盈耳と云本文成取の序  
 か今ハあする川の瀬にる恨を聞ずさむ石の巖とらる飲のそ  
 あふふと  
 うけり

梁元の昔の遊春  
 王之月漸落周  
 穆の新會西  
 母之雲歸と欲

梁元昔遊春王之月漸落周穆新會

梁元の昔の遊春  
 王之月漸落周  
 穆の新會西  
 母之雲歸と欲

西母之雲欲歸

政成布之庭ハ  
 風流未必寛  
 闕於敵未  
 也文好之世ハ  
 德化未必光  
 炎より干光未  
 之成兼者ハ我君  
 也

布政之庭風流未必敵於崑閬兼之  
 者此地也好文之世德化未必光于  
 黄炎兼之者我君也

大炊御所の南堀河の西に冷泉院と云御所あり村上帝の御と云  
 こゝに宴會の序なる上の句ハ所の有る美は成や下の句  
 ハ君の徳成り也政成布行ハ天下成治る事と云成  
 布政の庭と作らる崑崙山の閬鳳臺あり仙人の居處ハ帝王

大炊御所の南堀河の西に冷泉院と云御所あり村上帝の御と云  
 こゝに宴會の序なる上の句ハ所の有る美は成や下の句  
 ハ君の徳成り也政成布行ハ天下成治る事と云成  
 布政の庭と作らる崑崙山の閬鳳臺あり仙人の居處ハ帝王

榮啓期之三樂

歌一也末常樂之

門未到皇南謚

猶法皇之道に

王辰日臨文鳳見紅旗風卷

て畫龍揚

刑鞭蒲朽て螢空去諫鼓苔深

く鳥敬馬不

の居處とて世の政の事とて多し然し若くは更蒲鹿に生かすかど質打るものにて風流崑閑小歌さるものとはるれもの此處こそ政事の上の風流と兼らさうと此處と冷泉院又文章好の君唯風雅の事と引て明德聖化昔の賢王のいかにては我君こそ文と徳と兼ひて黃帝炎帝神農の化光一のものとせり

榮啓期之歌三樂未到常樂之門皇南謚之迹百王猶暗法皇之道後江想

出世無漏の常樂をば知り常樂と四徳波羅密の中の二徳三樂ハ前卷酒の詩に叙す皇南謚帝王世時記に作百王の治世述れども無上法皇の道ハ辨ずと太上法皇四曲成不れどもたつて詞たり帝王世時記本邦一舶來せりや智太極殿の朝拜のや成作り王辰ハ帝の御後に立たる屏風の下にその儀礼の辰ハ綠素の下に屏風ハ文成畫て威儀示す天子の居處とて王ハあて云字ハ文鳳帝の御衣の織文成云王辰の日がさて文はまえる鳳の形ハあしらふとあつて朝拜の庭ハ紅の旗成建る風の吹卷時ハ畫ける龍揚は太極殿の慶建四神の青龍の旗かどのさる

刑鞭蒲朽螢空去諫鼓苔深鳥不驚

無鳥つて台と云題ハ罪人成ら鞭成刑鞭と云劉寛王相公字ハ文鏡良深に人そ蒲成鞭成ら罪人の脊成てて刑ト後漢書に出二君上に在せば民刑知て罪成犯る蒲の鞭をいづくに朽螢とありて去と月令に腐草爲螢とあつて螢之とて草より生す上にある臣政道に私あて民こそ成愁訴んとてとて其意君に達ハ帝亮くまはれに門外諫鼓をうみこま成鼓は自ら聽めんと世治り民愁なれば鼓とのく苔深て庭に下り居鳥と鼓の音らるるを敬馬さるる

應神天皇第四の皇子大鷦鷯の御門仁德帝と申其御所宇治  
 に住るふ城菟道稚郎子と稱す御父の愛子也崩御の時御位  
 城あづももよに仁徳難波津の宮に居るふ城まきめ御兄るまきと  
 ある仁徳御父の命ごとくもひの譲りひ三とせに成るるわびふ  
 宇治の宮薨ト多ひり此時王に今ハ御位城つがやのくと歌にまき  
 難波津に夕ごりのせこの花も咲いさばと仁徳の難波の宮に居た  
 ちみ城冬菟道今ハ春べい冬去て春の主たる理こさや  
 この花とハ世保ち波風城治ち民の愁城萌出る春小菟道  
 城兄花梅の兄と應神十六年二月朔日は百濟の王の子  
 王仁來朝すわり難波の宮の師とありて仕へてまうらる  
 ちりぬま又る春ハさびぬちとせの後ハ君城ののまん  
小松天皇  
 五木の花ハちとど又來る春のこのとあるとのされど千とせ乃  
 松千代の椿とど限るたにわび君代ハ限あるまうらるまこの  
 花のちハ君城ののまんと此御歌ハ天皇の親王ハてちりる  
 時かどとせのくるらん奇花祝の心とぞ

親王

親王

庫車軟輦貴公主香衫細  
 馬の豪家郎

庫車軟輦貴公主。香衫細馬豪家郎

東平蒼之雅量  
 寧漢皇褒  
 貴無雙之弟  
 非哉桂陽鏢之  
 文辭亦是齊  
 帝寵愛第ハ之也

東平蒼之雅量。寧非漢皇褒。貴無雙  
 之弟哉。桂陽鏢之文辭。亦是齊帝寵  
 愛第ハ之子也

冷泉院の親王をためて孝経城讀の詩序に詩に文章の巧  
 を称美し奉るとして昔の親王城て今にけらる東平の

菅三品

江都之勁捷也。七尺の屏風其徒高淮南之求神仙也。一旦雲に乗而何の益ある

卷已開て己の知子爲の道秋の風に悵望す鼎湖の雲

我王の孝行先何到梧岫の秋の風一片の煙

此花非是人間の種に非瓊樹枝頭の

獻王右の倉少の孝友の賢者して寛二の雅くと東觀漢記に出る人物を漢の明帝褒美貴寵雙りた弟にあつたや北齊の文帝弟の王子名を鑠桂陽に封せらる文辞の才賢の人そ文帝限つた愛する

江都之好勁捷也。七尺屏風其徒高。淮南之求神仙也。一旦乘雲而何益。

親王入學の詩序に王が昔の王に比しての句に此の頃句に王が不めてあつても譏る句の集ふ入る古の江都王が勤身捷七尺の屏風を飛超人の及ぬと強ちて勁捷をば爲すもまじとるも徒に高くと淮南王劉安仙を得て雲の詩の釈に出空に飛けりも後蜀巖と云れ頭白して落つるさば一旦雲に乗ても何なるせんとい

開卷己知爲子道。秋風悵望鼎湖雲。

冷泉院第七の親王孝経が讀と云作る孝経の曾子の書して孔子の傳る孝の道が説く此卷は開讀

子とて親の奉ぐる道が知鼎湖の黄帝の御墓ある處から秋風吹くそのかたに悵望と云て先帝を思ふ悲しみに成りて云黄帝首陽山の銅て荆山の麓から鼎湖の白龍降るこゝに住帝が遊一員て天に昇る臣か龍の足尾に取つて七十餘人天上す龍の鬚に取付一人半天に至りて地に落る黄帝の弓も其處に落る考武本記に出其れの湖が鼎湖と名づる河建黃帝の墓とい和漢とある怪異つる古跡あるとい

我王孝行先何到梧岫秋風一片煙

是も上か親王の御弟始めて孝経が讀る時の作菅推規舜帝倉梧の崩れ多の陵あり岫山のこゝ倉梧あり我親王孝養の御心何れに思ふ先帝冷泉院が御墓所が梧岫の秋の風に一片の煙を思召らんと云てらかて句意前の詩に似たり

此花非是人間種瓊樹枝頭第一花



第二の花

此花は是人間の種に非再平臺一片の霞に養ふ

王孫入學の詩に石花が開る軒に咲く類に王孫の宮後江根公崑崙山の仙宮より瓊樹の石花は人間の種にあらばと云く王孫の凡種にさすまぬ瓊にあらざるを仙宮に瓊樹あり第二の花と第二の御子とすませり

此花非是人間種再養平臺一片霞

前と同座の詩之意も似たり平臺秦の始皇山丘に菅三品造ら後梁の孝王の所居に漢書小出花に霞に養ふ之意もあはくして王孫も王子の御子二重の心城再の字より○の相公朝綱老儒菅三品文時若年の秀才一座の會に暗に同句作拾遺

詞書に聖徳太子片岡山の辺道人の家におくるに飢る人道のやとりにけり太子の乗る馬をまうて行ずむち成あげく打どもさる退くさる太子則馬より下て飢る人のめとすもひて此紫のうの御衣はぬが飢人の上にかひ歌をよみてのうくまらるや片岡山の飯に飢てある旅人あなまを

の道人太子傳におくるひむとくあり凡人と元亨親書に連磨といえり太子の御歌支那照那ハ片岡山の枕詞云る旅人に飢人ともいハ汝親方くるるやと返哥班鳩ハ太子の宮所其地に富の小河あり此流は未来未代絶はまハ太子とて正くれやまことハ云くたことハ法皇るハ大君と云く富の小河の流絶くるやハ太子の御名とハ心ゆまが死見歌の表裏の意ハ太子の御事富の小河ハ太子弘通の法水と云ハハ尊三會の曉まてると云まが我大君の御名とハ其法水の流行るに云くハと教主親尊の御名と云くハ忘と奉るまハと云く

丞相 付執政

丞相日本の大皇執政ハ攝政関白と云漢の武帝の時始て右丞相と云

季文子子不衣帛魯人以為美談公

孫弘身服布被汲黯譏其多詐

魯の昭公の相季孫行父と云ハ利と貪す君に忠のこぞせし人して家に帛と衣くる妻を厭に衆と食ハ馬をく府に金

丞相 付執政

季文子子不衣帛魯人以為美談と為公孫弘が身に布被と服る汲黯其詐

多岐議

良詩國史抄

卷之七

新

十一

玉より文子の謚と在傳史記に出魯國の人傳て美談とす  
左氏より季文子と譏てあまことも章と断て義を取らるれば  
言と以て意と害へは漢の丞相孫弘も武帝の大臣よて  
富貴の人ることも故室と惜み貧て外ハ賢人のさぬ布  
の被と服ると漢書小出汲黯字ハ長孺淮陽の人之直く實  
ある人也汲直と云之此人公孫弘と實の賢人よあらんか  
人目と云りて偽多く賢  
多岐議

百里奚食と道  
路に於て穆公  
之に委に政を以す  
寧戚子牛と車下  
に於飼て桓公之  
小任すふ國を以  
す

百里奚乞食於道路穆公委之以政  
寧戚子飼牛於車下桓公任之以國

百里奚ハ周の時漢の國の大夫なりしが君と諫て用ひ漢書  
らき下立退き後貧なりらるる道のほとりに食を乞ふるを秦  
の穆公其賢と聞て迎へ國の政を委たりらるる大に用と強  
し列國は威をふるひ虞の君ハ其諫と用す晋より亡んたり  
史記に出寧戚齊の桓公の賢かると知て仕人と思へし使と得  
た高人となり車と負て桓公の門よやどりらるるに公客と題する

孫弘問閑  
閑客無傳説  
舟忙して人に借  
不

孫弘問閑無閑客傳説舟忙不借人

大臣にや一國の事任せしる果して賢者なり事は  
三齊畧記其他諸書に出寧戚子などの子ハ男と云て  
とて門城ゆり齊が車城もひのけり其時牛の角がけり  
歌ていこく南山燦々白石爛々中有鯉魚生不遭堯與  
舜禪布單衣纒至脛長夜湯々何時旦微牛苦々  
何時駕矣桓公此歌ハ凡人にあはれと召て後車にのせ  
大臣にや一國の事任せしる果して賢者なり事は  
三齊畧記其他諸書に出寧戚子などの子ハ男と云て

西京席門乃陳丞相之舊宅南山

芝澗寧非袁司徒之幽栖

西京の席門は  
乃陳丞相之  
舊宅なり南山  
の芝澗寧袁司  
明永國家少

卷之七

准

十一

後江相公

徒之幽栖小非や

周公旦者文王之  
子武王之弟  
自其貴ハト也ハ知  
り忠ニ仁ニ公者皇  
帝之祖皇后之  
父世小其仁ヲ推

傳氏巖之嵐は。  
殷夢之後小於風  
雲ハ雖巖ハ陵  
瀨之水ハ猶漢聘  
之初ハ於涇渭ハ

卷之七

新

七

小野宮関白實頼公清慎公攝政成辞ハ多ク第三の表ハ漢の丞相  
陳平ト也ク家ハ貧シくシテ黄老の學ヲ成シこのノ其家ハ西京ニ在リにテ席  
成リ門トセテ漢書ニありシ舊宅トハ作りシて數の衰  
安字ハ邵公ニ世ニ成シ道ニ南山ニ籠居スりテ芝澗ハ之ヲ草生スる  
にハの意也ト後ハ司徒ニ至リ世ノ政ヲ成シるニ國家ヲ思  
ふニの心也ト蒙求ニ出ス此表ノ心ハ右兩人ノ下ニ死シて席  
門ハ芝澗ニ幽栖スる例也ト清慎公實頼公の心也  
その心也ト閑居スる例也ト清慎公實頼公の心也

周公旦者文王之子武王之弟。自知

其貴忠仁公者皇帝之祖皇后之父。

世推其仁。

小一條太政大臣忠平公謚貞信公と稱す攝政辞退ノ表ハ成文  
時ハ卿書ノ史記ニ周公旦ノいとク我ハ文王ノ子武王ノ弟ニ成  
王ノ叔父ニ於テ天下ニ亦ハ不レ賤シとある也自ハ其貴ト也ハ知リ作  
也リ忠ニ仁ニ公ハ深殿太政大臣良房公ノ謚ニ此御女明子ハ

文徳天皇の皇后ハ清和天皇ノ生メるハ一ハゆ  
清和帝の御外祖トもハ攝政トもハ仁惠ニ淺クとハるハ世ニ  
かク其徳ヲ知リるハ義ニ周公旦ハ成王ノ幼少ノ時ニありシ  
攝政トもハ忠ニ仁ニ公ハ清和帝七歳ニ於テ位ニ即セりシ御母方  
の祖トもハ攝政トもハ相ニ似テるハ也ト  
かく書クるハ也

傳氏巖之嵐。雖風雲於殷夢之後。巖

陵瀨之水。猶涇渭於漢聘之初。

一條雅信ハ公ハ大臣ニ成リ辭ハ多ク表ハ文ハ成リ書クるハ傳氏巖ハ  
前卷草の詩ニ釈ス風雲ハ物ト相ニ吐キふ心也ト帝王ノ能臣ト遇  
あリるハ雲ノ風ハ也ト殷ノ武丁高宗ノ賢臣ト成リ夢ニて傳説ハ  
得ルるハ感會也也ト嚴ハ陵瀨ハ後漢ノ光武帝ハ位ニつキ  
あリるハ時ノ友ニ嚴光ハ字ハ子陵ト志ハあるハ人ト也ト帝位ニ  
登リひテはハいクもハ賞セらレるハ也ト思ヒ忘レるハ其沙汰也  
子陵孤亭山ノ知リるハかク也ト釣ハ垂テ遊ビるハ其心也ト天変  
ありシるハ天文官奏す君故人ハ忘レるハ其心也ト惟異ト也

月永國字少

卷之七

新

七

春去夏闌て袁  
司徒之家の雪ハ  
路達應旦ハ南  
暮ハ北鄭太尉  
之溪の風ハ人知  
被

帝こそ嚴子陵さんと三びまで聘使わさども辞さる帝其  
處に往てん多ハ子陵高く卧て起ば床のやとらいつて腹成ぞ  
ゆひ陵さん恨も朕さ忘すとのるひ同車して飯り是より  
陵とるの卧もひより陵足成りて帝の御腹の上におさるるハ  
太史奏して客星御座成犯せりと帝のさる故天子陵  
苦うぐべとあり後漢書に之あり其釣成垂一知成嚴陵瀬  
と号しり涇水ハ清渭水ハ濁より三び勅成也又ハ同車  
ありハ背にありハあさぐひるどせ成すもさるにたさる

春去夏闌袁司徒之家雪應路達旦  
南暮北鄭太尉之溪風被人知 同上

上と下ト文之春を過夏も闌るも今ハ袁司徒が門の雪消  
て通るも色ハ彼成尋出さるやと袁安がとハ三章前ハ秋あり  
且ハ南風吹暮ハ北より吹鄭太尉が溪の風世にさるも  
人さる知ハ早く彼二人の賢者成尋ゆる多ハ愚身ハいと賜  
る也ト云意ハ漢の時大雪一文餘積る洛陽の令奉行  
く見行るも人家も雪成拂ふに袁安が宿路もさる

る色はずに死せりと思て雪成拂ひ戸成開袁安倒卧て起す  
いぞかくあさると問ハ大に雪ありて人皆飽る我むる然  
ざんやと答り其賢るも世にさる司徒に至後漢書  
録異傳に出る鄭弘字ハ巨君會稽山陰の人其家溪の南  
にあり其北に白鶴山に薪成樵る其谷成若耶溪といふ  
船成此溪川成りるに風波あつ漕るも限り或時山  
かて矢成拾ハ暫ありて異人來て求る出てやうるに汝思ふ  
トあふ我叶んとさるも我薪を採んと此成涉る風の  
定らざる成るも不異人かさる我此山の神ハ朝ハ南風成吹送  
暮ハ北風成吹送りめんも去る其後朝ハ南冬北より  
吹風定り舟成安一今も成然と云帝聞て官成太尉ハ  
多ハ日本の大政大臣ハいも成事ハ後漢書傳に出  
山撮あくもさる成るもれをさるも風吹ぬをい  
清慎公ハ白雲親ハ月輪寺の花見の時の歌ハ公の政事もさる成  
るもさるもさるも丞相の部ハ枝成りるもさるも吹ぬをい  
山さるも成あくもさるも悦ぶる  
又一条禪問ハ清慎公の歌とさる

將軍

三尺の劔の光は  
氷手に在一張の  
弓の勢八月心に  
當たり

雪中に馬放て  
朝に跡尋雲  
外に鴻雁聞て夜  
聲射

將軍

將いとも二方五年人戦軍と云ふて三戰はた  
ゆるを之數多の兵をさぐり乱國征の職

三尺劔光氷在手一張弓勢月當心

武士の形勢云々三尺の劔漢の高祖の故事前詩  
綱又吳の季札の劔雪霜のどく氷のどとわり劔のさへ  
氷ゆるも張弓八月心似胸の前横へる  
月心當と作り李都使に贈る詩なり

雪中放馬朝尋跡雲外聞鴻雁夜射聲

武士の戎作り周の時齊の桓公北の方孤竹とて征  
るに大雪ゆり道失ひ多く從兵道迷ふ歸ると得  
上卿に管夷吾仲穎水の人の才發の臣して老る馬放  
とて其言に従り古郷の道得る韓非子に出魏王の  
臣更嬴とてハ虚發とて虚空に矢發て鳥はとるの妙技  
あり王の前して戸の東より西へ過る聲は聞やと射落せり  
とるに將軍の才と藝と作り鴻雁の  
大なるもの一本ハ鴻雁雁小作り

千里往來征馬疲十年離別故人稀

何東の虞氏の將軍遠に國の下り居小贈る詩  
遠に道往來乘征馬疲と他國に年経て知人稀

隴山雲暗李將軍之在家穎水浪閑

清眞公前奏大將戎辞や表漢書に武帝の時李廣  
師將軍とあり大宛戎平げ隴西に辺土戎守居たりあり

隴山其處の山して雲深は心云十洲記ハ夏禹王の上  
并洲に蔡辛と云ものあり賢小して學戎好相の官戎のん

と在戎辞して云堯舜の世ハ四訓せびて民そのをり人  
監せびて食小之るがかの二帝ハ心大なると虚空のどく

徳天地と等君ハ御心とて大事戎志とのハ罰をせしむ  
罪人とせぐる世に封食せんと我ハ小あはれと深山に入る禹王

耻く七日食の此人穎水にかく居る浪閑と云蔡示征  
虜是人一説に文選五臣註に木子蔡示輕將軍とて大將軍に

月永國字少

千里往來征馬疲十年離別故人稀  
隴山雲暗李將軍之家在穎水浪閑  
蔡示征虜之未仕

從ひ左賢王の塞攻撃是征虜の義とを征はう虜を  
むすぞ表の意は尤大將ハ武官也世にける武士どもあま彼  
つひく我ハ辞まべら  
との義なり

職列虎牙。雖拉武勇於漢。四七將學

抽鱗角。遂味文章於魯。二十一篇。順

職虎牙に列して。武勇於漢の四七の將に於拉と雖學鱗角は抽て遂に文章は魯の二十篇に於味

右親衛藤原將論語讀の序に虎牙、近衛府より大將君の左右に侍は虎に牙あるを後漢の光武帝二十八人の將軍あつて王莽を討つ其四七二十八人の將をもこのつとせざる意は拉と云聖人の世に出る麒麟、額に二の角あり仁獸にして常に出ざるを希らるるの故其角にると鱗角とつり學ぶものハ牛毛よりえげ得るこの鱗角、角と云ふと云本文九經略に云ふ此ハ藤原將軍の文章は鱗角にると抽と云魯の二十篇ハ論語なり武官に在て文道は嗜は美ふるなり

雄劍在腰拔則秋霜三尺。雌黃自口

吟亦寒玉一聲。順

雄劍腰に在拔則秋の霜三尺雌黃口自す吟すれを亦寒玉一聲

天曆の御時後撰集撰るべき義あり能宣元輔時文源の順等五人梨壺にちり謙徳公伊尹藏人少將を和哥所の別當ふらひらに震筆の宣旨の奉行の文は順書らる干將莫耶雌雄の劍の古事にてよれ劍と云心に雄の字は用あり吳王莫耶は劍造らんと鉄はるふ二枚は作一枚は獻一枚は私す王の劍鳴あやんとて故問或臣いらく是ハ雌劍は雄劍は王莫耶を誅す又云吳の季札が劍霜雪のじとあるハ漢高三尺の劍と云と武官太刀は帶る句は雌黃ハ王の名に王は行詞雌黃のじと云り口はあることハ心ハ和哥文章ハ口より王は吐く寒玉一聲ハさる聲あると云孫興天台の賦は友に示す時と云る地ハ拋は金王の聲ある

地、劍の影に驚  
て便死、逃馬、  
衣の香、  
人、  
欲、

地驚劍影便逃死馬惡衣香欲啗人

將軍の威、  
船、  
地、  
馬、  
人、  
ん、  
後撰

朱、  
小、  
那、  
緋、  
刺、  
史、  
每、  
州、  
刺、  
史、  
一、  
人、  
六、  
百、  
石、  
と、  
り、  
武、  
帝、  
初、  
て、  
置、  
り、

士、  
女、  
の、  
笙、  
歌、  
は、

士女笙歌、  
月、  
下、  
使、  
君、  
金、  
紫、  
稱、  
花、  
前、

月、  
の、  
下、  
小、  
直、  
使、  
君、  
の、  
金、  
紫、  
花、  
の、  
前、  
稱、

精、  
明、  
合、  
浦、  
珠、  
小、  
相、  
似、  
断、  
割、  
昆、  
吾、  
の、  
劍、  
不、  
知、

精明合浦珠相似断割昆吾劍不知

三、  
百、  
盃、  
雖、  
強、  
辭、  
邊、  
土、  
不、  
是、  
醉、  
鄉、  
此、

雖三百盃莫強辭邊土不是醉鄉此

土は是酔郷る  
不此一兩句重  
詠可北陸豈  
亦詩の國るんや

一兩句可重詠北陸豈亦詩國 保胤

源の順能登守下る時餞の序へ二百盃の餞別の詩  
小出辺土に酔郷る酒に友小あひ興成催してこそ  
足下の今行くと能登北陸道るまはも詩の境小あは  
此吟てよといくびも重くに

新本ヤ  
るに屋にのりりまは燿ら氏のかまど娘ひ小なり

仁徳天皇四年二月擲より四方城を築く民疲朝夕の煙をたぐ  
くふまらふぞ二年民休め宮殿破るもども修理成と先  
七年の四月又擲閣に登り御覽まふすの百姓の極小たこ  
つる城悦びのひ詠る小竈に唯人家のよしと田里城安ん民の愁  
若城止め天子と治城るのをるハ  
刺史の勤也此部か入

詠史 史の勤也此部か入

史を詠す  
燈暗く敷行

燈暗敷行虞白涙夜深四面楚歌聲

史の項羽本紀は題として詠せり楚の項羽ハ天下双極相公  
るに剛勇の將して身の長八尺力鼎城わぐ漢の高祖ヤ  
天下は年と九年七十余度の戦に項羽皆勝るもども張良  
が謀韓信彭越などの智めて項羽は垓下とよ小敷万騎小て  
用り夜深て漢の陣に楚の歌るる声ハ是ハ項羽をさ  
る楚をてに漢に降漢の方に楚の兵多しと思ひ力城生ひ  
り項羽竈愛の美人虞氏と几帳の内に夜酒を天口て  
悲るる詩作ていりか抜山兮気蓋世時不利兮  
騅不逝騅不逝兮可奈何虞兮虞兮奈若何と數  
返るるはは虞氏をさし和して云漢兵已畏地四方  
楚歌聲大王意気尽賤妾何聊生とらるるはは  
項羽をさるるは落流敷行やと秘藏の名馬烏騅が打乘  
東城に落ゆに漢の將呂馬童王駱かよともの討ち上  
むり是城題して燈の下に虞氏が別城ちり敷行の版  
城流一夜ふまて四方の圍漢兵の中に  
楚歌の聲をさしりるはは



賓雁書秋葉落牡羊期  
秋葉落牡羊期  
歲花空

賓雁繫書秋葉落牡羊期乳歲花空

漢書の蘇武傳に詠ぐ前漢の武帝李陵は大将軍  
蘇武は副將軍として北の方匈奴を討利あべりか二人  
胡国にそそり木子凌の降参せり匈奴蘇武を解上相  
せん云は用さるる怒て北海の濱に羊を養せ牡羊乳は古郷  
へ飯さんと云らる蘇武十九年胡地に苦く誠忠をいふ  
死に之りえ雁の足に文を結びて故郷へはくは漢の帝  
上林苑に丁射射て文を得多ひ蘇武が存命在は知て匈奴へ  
賄賂をもちぬ漸放ち歸し心疲疲るる節杖てくる  
來し此意は作賈の胡国北の地より都へ賓客に送るべしと云  
其足に書は繫く時節秋るる樹葉落るるを  
牡羊の子は乳はくは待ても得る其間ハ歲月  
空しく過去を云蘇武は八月十五夜の詩の歌の叙をい  
他日遂に逃秦虎口暮年初謁漢龍顔

他日遂に逃秦  
虎口暮年初謁漢  
龍顔

と云るは二世愚かして怒又こそや叛逆はあは盜人らるる  
て所の長吏召捕すと云は二世もろこひ帛を穿り賞せらるる  
設つると孫通は虎口を逃さるると云らるやうて去て楚の懷  
王はつゝのち漢の高祖のつゝ龍顔ハ雲の詩の叙は  
醉狂のあまり無禮多りるる魯の諸生と我門人と朝儀  
の禮は昔古に漢の正月ハ今の十月るる長樂宮にて其  
示はこほひ群臣に天子は拜せり法は正しるる酒はのめ  
とも喧嘩しては失ふものなり高祖吾今日皇帝の貴  
はと云をまると悦び太常にぬさんで金五百斤をひり  
はして宗廟朝廷の儀法とくは孫通大常とて  
論し著す処又他日とてか以前と云はるか

かぞいらいらにあをまと思ふん三とせはるるぬまは  
日本紀に伊弉諾伊弉册の御子蛭子三年まで足らずと有  
父母ハ二神とて云親の御身に  
とてこそ憐れむすん

琅言... 卷之八 雜

和漢朗詠集抄卷之八

雜

王昭君

漢の元帝の宮女王昭君漢の文帝の諱を避けて明君と云王氏の女後宮三千の

中第一の美色なり匈奴の王單于漢と和睦を賜り帝の婚するんとて三千の美人の中形容醜

をぬりんとあはれども一々見だるるにわびとて画工毛延壽に命て其右と形を繪小字し美人皆

賄賂を贈るるに明妃王昭君ハ已に美貌恃んで送るるもバをこめて醜く画るるを竟に胡国小るる小決

一行のぞんで敵覽あはせに希るる美女の惜もども綸言汗の下くさめり匈奴小嫁一り

愁苦辛勤 顔頼盡 如今却似畫圖中

王昭君都を去て遙々匈奴嫁一愁苦哉之のび辛勤て 顔頼もとく盡るる如今却て醜く画るる畫圖小似る

雜

王昭君

愁苦辛勤 顔頼盡 如今却似畫圖中

身化して早胡の

卷之八

雜

朽骨と為家ハ  
雷て空漢の荒  
門と作

身化早為胡朽骨家雷空作漢荒門  
王昭君の身、胡國に埋もれ、朽骨と化ると早く、紀綱言、家のも漢の都に雷て空く津の門と荒果たる死後のことを云

翠黛紅顏錦  
繡の粧泣沙塞  
出尋て家郷を

翠黛紅顏錦繡粧泣尋沙塞出家郷  
此詩二首四韻、翠の黛紅の顔、錦の繡、後工根公、せる衣服を粧、泣、家郷を立出、黄沙の邊塞、尋、向

邊風吹斷秋  
心緒隴水流  
夜の淚行

邊風吹斷秋心緒隴水流夜淚行  
前の胸句、邊塞の風に吹断と云秋の心緒の字に同前、約、漢、胡の境、隴山より出る川の辺を泣々行を流、流、ち、添

胡角一聲霜後  
の夢漢宮萬里  
月前の腸

胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸  
前の腰句、胡の曉、角、吹、笛、吹、れ、耳、入、て、霜、夜、の、同、前、夢、を、覺、す、月、を、こ、し、漢、の、都、を、萬、里、に、思、や、り、腸、も、断、る、り、る

昭君若黃金の  
賂を贈定是  
終身帝王小奉  
ぜん

昭君若贈黃金賂定是終身奉帝王  
前の落句、通して八句一律、昭君画工の賂を贈るは身を、終、ま、漢、の、帝、に、奉、て、く、ら、れ、め、ハ、ス、ん、と、の、哉、同前

身埋胡塞千  
重の雪眼盡巴  
山一點の雲

身埋胡塞千重雪眼盡巴山一點雲  
胡塞、北方匈奴をこし、雪多き、巴山、胡國と源英明、漢地の境へ昭君朝夕漢をまゝ、巴山の雲を見つくすと

數行の暗淚  
孤雲の外一點  
の愁眉ハ落月  
の邊

數行暗淚孤雲外一點愁眉落月邊  
美人の眉片月、似と云、真の心を昭君の題、作、都の方に、同、一、孤、の、雲、を、か、め、戀、し、く、て、數、行、の、淚、に、眼、も、暗、入、さ、の、月、ハ、古、郷、の、曉、も、山、の、え、い、る、月、を、り、り、わ、い、し、の、い、づ、く、ら、る、時、も、い、く、も、た、ね、の、い、ま、の、ま、

胡詠國字抄

妓女 酒宴の興に弄るるのちり  
足、山、い、ん、枕、言、葉、足、城、は、つ、登、意、之、聞、人、も、好、く、音、吹、啼、ハ、郭、公、云、て、胡、地、に、昭、君、唯、一、人、數、行、の、淚、孤、雲、の、外、に、い、ち、ち、あ、め、る、と

張文成

妓女

容貞似舅潘安仁之外  
姪氣調如兄  
崔季珪之小妹

外人ハ識不恩  
承處唯羅衣  
御香を染有

嬋娟兩鬢實  
秋蟬の翼宛轉  
雙蛾遠山  
の色

怪ト莫紅巾の面  
遮て咲と春  
風吹て牡丹の花  
を綻す

李延年之族  
一妍以始飛衛子夫

月永國子少

容貞似舅潘安仁之外姪氣調如兄  
崔季珪之小妹  
張文成

張文成と云人唐の皇女に奉りて後之思ふも思ふも  
色も出さば心一に歎き過せりが思ふも思ふも奉んぬ  
遊仙窟の文作世に引る世人の唯作文と思ひく皇女我  
と思はるる也此句ハ其文成の河の流を以て深山思ひ  
がぬ仙宮に至る女に案内を問ふ彼女その所の仙女十  
と云人のありさぬを賛て詠詞十姉が容貞ハ晋の潘安仁の  
美術に似たりと云んと詠詞詠安仁が外の姪たるも舅  
の安仁に似たりと云るを潘安仁と春の部雨の詩の外も  
出此人市を過る色好る女子あはれ珍果車投入と  
崔季珪字ハ季珪清州東武の人容貞美ことばたりて仙女を  
氣調ハ世俗に似たりと云と云

外人不識承恩處唯羅衣染御香

宮詞と云て妓女が帝室得る宮中のこまを我身思元稹  
電城うけし人こそあね綺羅の衣裳に君の御染香と  
まりある人志まぬ心の  
内におひ出るる

嬋娟兩鬢實秋蟬翼宛轉雙蛾遠山色  
美女の兩の鬢の嬋娟ハ秋の蟬の翼の如く雙の蛾の眉の宛轉ハあをみどりる遠山の色のとれ成いなり

莫怪紅巾遮面咲春風吹綻牡丹花  
妓女ハ紅巾を面を遮て咲るを牡丹の花が春風吹綻す

李延年之族一妍以始飛衛子夫  
夫之待時在衆醜而永異  
野相公

李延年能舞漢武帝召奏其詞北方有佳人  
絶世而独立一顧傾入城再顧傾入國  
我妹

卷之八

佳

之時待衆醜  
不在而永異

秋の夜月を待て  
總に山を出之清  
光望夏の日蓮  
初思て初て水  
穿之紅艶を見

宮人の才色兼  
糺樓未下詔來

添

雙環且理て春  
雲軟片黛總成  
曉月織

羅袖ハ大尉を廻  
小違わ不鳳釵  
ハ香奩を鏤  
トを悔

和風先薰煙  
出珍重紅

明永國家少

稱賛する武帝召見て其美色を愛し李夫人是  
世にわひ飛立身する漢の武帝の皇后衛氏子夫  
主の家に行幸具一飯電一ひ終に后と有り時の人歌  
ていり男成生て悦ぶる女成生て悔する色帯子夫をん  
すやと事史記を讀ん賤る身の時待得て后より衆人の  
醜中より得多ひ一ハ一ハ勝てん一電も永く異しと云  
秋の月を待て山の端より出る清光望夏の池辺に蓮を  
思んに水の面にをめてむらる色  
紅艶あるはさるこちす

秋夜待月。總望出山之清光。夏日思  
蓮。初見穿水之紅艶

宮中の美人粉黛の粧を催作序之女の化粧して出るは  
秋の月を待て山の端より出る清光望夏の池辺に蓮を  
思んに水の面にをめてむらる色  
紅艶あるはさるこちす

箕取宮人才色兼糺樓未下詔來添

前の序とむし詩四韻皆入る宮女の中才能あつて歌ひ管  
舞美色艶容やると兼するを誰か糺取て召る其  
美人化粧して下果さる糺樓を下と糺樓  
宣旨の御使さるる來る糺樓と作るあり

雙環且理春雲軟片黛總成曉月織

上の胸句に雙環ハ左右のじんづ春雲長髪ゆるり髪を雲ハ  
喻と多し理いゆる軟ハ髪ゆるり髪を雲ハ  
曉の月の織さるこちす

羅袖不違廻大尉鳳釵還悔鏤香奩

上の腰句に綺羅の袖に皺あるはすさるに召る  
ハ大尉を廻す違はる鳳凰の形に作る釵挿ん  
取出し香奩をか鏤ちたるも急に

和風先導薰煙出珍重紅房透翠簾

卷之八

准

四

房翠簾小透  
を

嫌らくは錦帳  
裏で長麝射を薫  
むることを悪く  
珠簾を巻て晚  
金を着て矢

今日の新饑  
鬢に死んと欲する  
泣先朝舊賜の  
箏を賣

上の落句の上に通り四句の律の律を成て妓女の秋の夜が同  
り先其形が之を薫の香は風が導き出来るよ紅の夜がとう  
翠簾より透てまをふくむといふも珍重なるか  
堪らざるがり菅家文草よ六王簾とあり

嫌裏錦帳長薫麝惡巻珠簾晚着釵  
此詩昔より題も作者も多き一説菅三品より妓女の來るを待  
てくるるるる錦帳がけく夜裳に麝香を薫りまを  
出來ぬを嫌の玉の簾巻釵さくそ

欲死今日新饑鬢泣賣先朝舊賜箏  
老命婦の詩ハ位以上の女宮中にはるを命婦と云其老  
さるるあ説はひ三條の命婦とて若時淳和の帝の恩寵あつ  
大水滝と云琴のひりて老半老て零落其琴を賣餘はす  
ける其意は作を云又誰と云ふわと老命婦は題マ  
今この饑と云はて新と云鬢のかは訓死はれにわつて舊  
賜はむのむる先帝より筆箏代替て悲はるる妓女老衰

の哀のうらまて琴箏通し用ても實ハ異ハ琴ハ五帝の時  
小わり箏ハ秦の蒙恬が作如士三絃今筑紫と此餘風より  
あまの風雲のうらみちぢぢぢぢとものすぐりてめん

あまの風雲のうらみちぢぢぢぢとものすぐりてめん  
み席の舞ををてある天女天女ををるるの文にかしらる時  
むせむる袖振山に天人あま降舞りる毎十年十月舞姫を  
戯覧あること天女とみ天の風雲の通路とあり  
天女をまむる美人と舞のありろく其さぬを詠り

### 遊女

秋水未鳴遊女佩  
寒雲空望夫山満

悲ふ所の佳人に寄詩ハ玉女貫女の腰に帯ハ帯の賀蘭暹  
ろくを是秋の水音のぞ聞我思ふ人の佩は鳴て未出來ぬ寒  
雲ハ空く望夫山にたるひ満るるを待人の來る當意成  
云て彼女も我を思ふて望夫石ののりやわわんと思ふ心ハ博物志  
小顔雀大將軍とて秦の国は計行く三年まゝ歸はりし其の  
女戀まをひく秦の境に臨て悲泣より終に命をとり石となるこれ

遊女  
秋水未鳴遊女佩  
寒雲空望夫山満

翠帳紅閨萬事  
之禮法異雖舟  
中浪上二生之歡  
會是同

家江河南北の  
岸に交心上下往  
來の船に通す

和琴緩調潭  
月小臨唐櫓高推  
て水煙入

老人  
昔京洛聲華  
の客と爲今江  
湖潦倒の翁作

老眠早覺常  
夜を殘病力先

月永國字少

望夫石と云と日本松浦の  
望夫石同日の詠なり

翠帳紅閨萬事之禮法雖異舟中浪  
上二生之歡會是同  
以言

遊女の詩序之伊豫守遠古が任国小侍らるに相るに下と河  
尻して作るも翠帳紅閨の内にて嫁る貴女のありさまを思ひ  
返るるまじいもくわぬぬらまじい舟中浪上小を分小應する  
歡會一同一と嫁娶の六禮とを納采問名納吉納徵請期親迎  
かとの礼法儀禮の委  
萬事の禮法とは是之

家交江河南北岸心通上下往來船

此詩下に通絶句一章して遊女の  
こゆ作する心にあつたりなり

源順

和琴緩調臨潭月唐櫓高推入水煙

和琴ハ日神天磐戸に籠せまの一時神樂奏せし時  
はくは絃弦鳴るにこころあつたりなり云六絃之遊女緩調  
潭の月小臨唐之船小乘櫓推く水上の煙入と作ハ遊  
女を極く船着に多く唐ハ楓橋漢水のほとり和小江口神崎  
河尻ると水辺不在る舟に  
乗居るものもこをなり

新古今  
老るるをいするはさるはさるをわまのふるまはるるをい  
海人

新古今  
題よみ人志すはわり渚海辺之蟹の子の賤さ身  
るま宿と夫と定ぬと誰とかく旅客にあひるるありさる

老人  
禮記曲礼ハ七十を  
老といふ

昔爲京洛聲華客今作江湖潦倒翁

白氏唐の元和中江州司馬小九遷して作る昔都しては時  
榮花小なりも今テ罪戾蒙りて江湖潦倒て公移するると聲華

老眠早覺常殘夜病力先衰不待年

卷之二

唯

六

裹て年が待不

再三汝汝憐他

事に非天寶の遺

民見と漸稀

紅榮黃落す

樹之春の色秋の

聲綴結綴抽

抽一身之壯心老の思

老の睡覚さ作たり老て六宵に眠候を待す自覚る夜ゆく  
残明る気力も身も衰病ちの老の身は明年も待ぬ

再三憐汝非他事天寶遺民見漸稀

康氏の雙に贈詩へ白氏唐の八主代宗の大曆七年小生也

十六主宣宗の大中元年七十六して卒す天寶六主玄宗の年

号へ康氏天室の比の人して死し殘さば古人皆亡生ハ

るに君の存命あるを再三憐にちる

紅榮黃落。一樹之春、色秋聲。結綴抽

簪。一身之壯心老思

菅三品

こまへ一條九大臣雅信公九大臣致辭せらる表を菅三品の書  
るの二の樹の春ハ紅に榮秋ハ黃落るるに一身の若盛るる  
時ハ君に仕老ぬとハ官致辭一世致道る心之綴ハくくくと訓公卿  
ハ紫の綴致結君に仕る抽簪ハ頭の色ハ致取舎して世城の  
心かり一身盛るる時ハ綴致むを老てハ  
簪致抽てん思のえるといふなり

少於樂天三年猶已衰之齡也遊於

勝地一日是非老之幸哉

菅三品

山家の部小を出る尚齒會の序へ見合貞觀年中大納言南  
淵年名卿行也序者丹部卿菅原是善卿也此會の始也安和  
二年三月十三日大納言藤原在徳卿より行也菅三品序者  
あり本朝二度の會へ白樂天ハ七十二して唐の尚齒會にあり菅三  
品六十九して此朝の會にあり三年少きども猶老衰の身なり  
と云へ勝地ハ此會の處を云老きども七人の老よりハ幸といふの

太公望之遇周文渭濱之波疊面綺

里季之輔漢惠高山之月垂眉

江匡衡

壽考策の文之周の文王渭の濱小狩り多史編トて云今日の  
狩ハ熊があらば羅ふもわび天より君の師致得せりあのみと  
そして呂子牙が茅小坐して釣るるに遇て何車にのせつれか多  
其年老くもハ顔の皺を波小くもとむと作れり此人武王を輔

樂天より少  
三年猶已衰之  
齡也勝地ハ  
一日是非老之  
幸哉

太公望之周文  
遇渭濱之波面  
疊綺里季之漢  
惠輔高山之  
月眉の垂





交友

琴詩酒の友皆  
我抛雪月花  
の時最君憶

陽春の曲調高  
しく和難淡水の  
交情老て始知

づくふうをばよせほ世の中に老成いそぬらん  
識も老人いよせむもづ方に我身はせん  
こころをばよせむもづ方に我身はせん

交友

友と交の深に門は同  
心は同どうすは友と云とあり

琴詩酒の友皆抛我雪月花時最憶君

設協律と云人と昔江南遊  
贈我琴詩酒の三を北窓の友とせ  
かの三は友と多しりに老ぬま其友も  
を雪月花の興ある時足下のそれ思ひ出る

陽春曲調高難和淡水交情老始知

張員外が新詩の巻の後に題元微之の寄詩  
陽春の曲調野中の歌の曲之野楚の都て歌好  
陽阿薤露と云曲ハ和さるもの數百人陽春白雪の曲は和

昔年我顧に  
長青眼る今日  
君に逢ハ已白頭

蕭會替之古  
過を託て異代  
之交締張僕射  
之新才を重推て

昔年顧我長青眼今日逢君已白頭

阮籍と云ハ晋の七賢の内から親人ハ青眼を以て  
甲衛に贈るものハ白眼を以て之ハ世説晋書に  
出此詩ハ

蕭會替之過古廟託締異代之交張

僕射之重新才推為忘年之友

忘年之友と爲

裴文籍後君  
孤我を見と新

明永國字抄

卷之八

唯

交友の詩序に會誓の大守蕭氏其の季札の賢るに慕て其墓に遊びたり世異なるも志は同く是れ異代の交と作張氏官僕射大跡のるに君が愛し重むる濟陽の江惣と云年新人るも亦あるを我と年の似るも忘友をせし

裴文籍後君久菅禮部孤見我新

渤海國より裴文瑒と云人本朝來りて贈之以前其父裴文籍が渡る時作者の御父菅承相詩がよりあるにありは思由に文籍の後足下のあるは聞及へるに久しと云我父菅部率して後我孤れて君に初て見白之文籍來りて菅部尚書も菅部卿と云唐名

いと我いらるる我契んむは世を志するまや

新千載集の戀の部の題よみ人志はあり親と友の交わらぬいなる前世の契約あるんありきたる

世はも志するせん砂の松むは友をぬくか

高砂の山の松を誰をむは人の知人ふせん思ふ高砂の松むは昔のものかやれは是も人顔の終る松と旧友を慕ふ

懷舊

懷舊の義をむは世は志のむはの

黃壤誰知我白頭獨憶君唯將老年

淚一灑故人文

白

前卷文詞の篇に出る遺文二十軸と云句や同時に故元少君が文集の後小悲の意は述二首の詩を作たり其一は

黃壤ハ黃泉ト云同くは死を訓我元少君失るを慕ひ思ふも黃壤そは途唯老の涙を遺る女にそむ

長夜君先去殘年我幾何秋風滿袂

淚泉下故人多

白

微之敦詩晦叔と云三人の友相つてて失くは長夜のそ二首の詩を作たり其の生死長夜ハ佛語之長夜のそ

明永國字抄

卷之八

唯

懷舊  
黃壤ハ誰我を  
知人白頭  
獨君憶唯將  
年の涙を將  
び故人の文灑

長夜小君先去  
殘年我幾何  
秋風袂に滿る淚  
泉下の故人多

君ももハ先づ去りて去りて我独留りて此後いくかの年  
後人やぐく至りて秋風の吹く後一入物悲しく浪歩るは昔の  
友はなほもももも故人とちのく多し  
冥土黄泉の下にありたり

往事渺茫都似夢 舊遊零落半歸泉

白氏の友元稹は洛水の辺に別れ五年かして夷陵と云白  
知つてわひ三宿する明に別れ送るる若く昔の事ハ渺茫  
小夢のやうなちの由舊遊一友もも多しハ方々零落  
こころこころ半ハ黄泉小歸せしむるなり

蘓州船故龍頭暗 王尹橋傾雁齒斜

白氏もや蘓州の刺史なり時乗る船も今ハ故てそれと白  
三のよと云んとて暗と云龍頭鶴首船のふりや船と云との  
るる王尹ハ所の名と云に橋がわたり雁齒と云つ板のさび  
雁の齒に似るる城象なり遊仙窟の文の註にあり古く  
橋も傾れ板も斜なり  
傾の字よく置と云

金谷醉花之地 花毎春句而主不歸

南樓翫月之人 月與秋期而身何去

右大臣親政の願文なり晋の石季倫花樹城多し管三品  
裁て愛せし金谷園ハ金水流出るハ合らるる名と云る城  
かりて云ハ花ハ散ても春来る毎に再咲白鳥主ハ又歸と  
なり一度亮字ハ元規南樓城建て月城翫一城なりて月

ハ秋にのにかさるる秋人ハ景をまよはせられたかのハ園乃  
花樓の月を愛する榮耀は捨無常は觀し早く菩提を越え

王子晋之昇仙 後人立祠於候嶺之

月羊太傅之早世 行客墜淚於峴山之

之雲

流紫安樂寺管公の廟にて作文あり唐の周の代に  
王子晋仙人となり侯氏山に歸來て笙を吹くは知り

源相規

金谷花に酔之  
地花春毎句  
而主歸不  
南樓月を翫之  
人月と秋與期  
去

王子晋之仙に  
昇。後人祠於  
候嶺之月小於  
立羊太傅之世  
早世。行客  
淚峴山之雲  
小於墜



むくく人々わくわくする。世に生じて今もあつた人々の思ひ出る人の

述懐

懐述 其他種々胸中鬱鬱たる如く

専諸荊卿之感激侯生豫子之投身

心為恩使命依義輕

後漢書文

専諸荊卿之感激 侯生豫子之投身 使命依義輕

秦の始皇 燕の國に在 樊於期 秦の始皇 燕の國に在 樊於期 秦の始皇 燕の國に在 樊於期

秦の始皇 燕の國に在 樊於期 秦の始皇 燕の國に在 樊於期 秦の始皇 燕の國に在 樊於期



英雄之所纏

在大仲

色に習見上邦  
視不者未英  
雄之纏所地知  
未

人間の禍福愚  
料難世上の  
風波老禁不

車前に驥病で  
駕駘逸る架上  
鷹閑かて鳥雀  
高

事事成て無  
て身也老  
醉郷去不何  
歸と谷

范象蠶責を収扁  
舟に於棹而名  
を逃謝安功以  
辭孤雲小鞭而  
志は養

英雄之所纏  
文選呉都賦蜀都賦に西蜀の公子山嶮嶮  
称美せしむ此賦は呉の王孫わがら呉都の盛るる  
と云るに上流述す詞に嶺と浅水の沙石はあま  
顔に玉淵にふり水中美玉の出る如く驪龍の  
莊子に千金の玉の九重の淵驪龍の領下に在り  
常にるふ如此水の浅はど我國の王ある淵の深  
と云ふと云ふ嶺と上国は視るに英人英雄千八  
の行歴する如く朝の纏日天の纏日纏と云ふ  
人間禍福愚難料世上風波老不禁

人間の禍福愚難料世上風波老不禁  
人の世の間のあつち何うて禍何うて福ありと云ふ愚  
の身の辨料は世を経行は荒れた風波は波は波は年老ても不  
車前驥病駕駘逸架上鷹閑鳥雀高  
賢人世のあつち何うて禍何うて福ありと云ふ愚  
寄るに驥は一日千里行駘馬は大夫以上車に乗る馬に  
許渾

唐の風其車に用る駘馬が病時ハ驥駘と云ふは馬の  
はありく逸と思へり架上鷹ぞて鷹のと云ふもの鷹は  
擲はこもく架上閑る時ハ鳥雀はのて高飛く  
是もかた人のる時ハのやと云ふもの  
事事無成身也老醉郷不去欲何歸

若し時々の事ハのどかとも何事成りとも身ハ白  
老らるるも今も何事と云ふハ唯醉郷去せずと云ふ  
酒の詩の如く多く出るは見合へり

范蠡收責棹於扁舟而逃名謝安辭  
功鞭孤雲而養志  
鞭下當在於字  
後江相公

范蠡此篇の二章目ハ断つて雲の篇の詩に石を逃ハ功成石  
遂て身退と云晋の謝安字ハ石宗陳の陽夏の人ハ常に臨安  
の山中に住り帝召ども至らず出でば功あらずと云ふ  
山林のあま意は孤雲の鞭ハ雲小乗ハ云かせり心のまの世







志すだに... 拾遺集... 法師... 清の字... 濁る世... 高光此歌... 法師に... 慶賀... 我人の... 述... 白

慶賀  
劍佩曉趨雙鳳闕  
煙波夜宿一漁船

劍佩曉趨雙鳳闕。煙波夜宿一漁船。

錢塘國と去と  
三千里一道の風  
光意は任て看

白氏九江郡... 劍佩帯... 鳳凰來集... 東宮と... 船の中... 錢塘去國三千里。一道風光任意看。

想得江南諸父老  
君因鞭撻子孫多

及第せし詩... 錢塘... 一郡大湖... 一時塘... 君因鞭撻子孫多。

吏部侍郎侍中  
着緋初出紫微宮

吏部侍郎職侍中。着緋初出紫微宮。

栗田大臣在衛... 式部丞... 式部少輔... 唐名あり

銀魚腰底春

浪波辭綾

鶴夜間曉

花月一窓交

昔眠雲泥萬里

躬を省て還

耻相知の久

君は是當初竹馬の童なり

祝 嘉辰今月歡極 無萬歲千秋樂 未央

明永國字少

或云是式部丞藏人等叙爵の時の詩也ハ吏部郎中とある  
也といり侍中ハ藏人職ハつらとらる緋絨着るハ五位の衣  
紫微宮ハ天子の居る所の北辰帝坐小まとい藩屏を衆星  
のくる天儀紫微垣といりをもめて五位藏人ハ補して緋の袍を  
着るハ赤内のものじりた絨替らる又一説に式部少輔  
侍中兼補の也吏部侍郎といふなり

銀魚腰底辭春浪綾鶴夜間舞曉風

上の詩の胸の衣ハ殿上人ハ幕會の時魚の袋ハ腰につる同  
魚の形ハ銀小て作帶のかざりにつる金魚袋ハ金小て作此魚  
ハ浪波をかき腰の底にあらると綾の文に雲鶴絨織る風ハ  
吹らるごとくハ曉風ハ舞と作ハ辭ハ去らるる

花月一窓交昔眠雲泥萬里眼今窮

上の詩の瞬の句ハ昔月花月一窓ハ弄ハ眠交らる今君  
貴ハ我ハ賤ハ天地雲泥と隔り眼も及ぬ心ハ窮とす

省躬還耻相知久君是當初竹馬童

落句ハ上ハ通じて律一章ハ君をも知身も知らむこと同  
久ハ思ハ恥ハ君ハ幼をいハ竹馬の童ハも今ハ榮我ハ  
長年ハのりとも沈むとぬとハ竹馬の  
故事前巻にこそく出たり

新勅撰  
古今ハ上ハ通じて律一章ハ君をも知身も知らむこと同  
久ハ思ハ恥ハ君ハ幼をいハ竹馬の童ハも今ハ榮我ハ  
長年ハのりとも沈むとぬとハ竹馬の  
故事前巻にこそく出たり

祝 慶賀と祝との祝ハおちるてのいといハ  
慶賀ハ人の悦ばの身の上の歡を云はつ

嘉辰今月歡極萬歲千秋樂未央

是ハハ雜言の詩ハ英明の作と云ハ江帥云踏歌の詩ハ謝儀  
聖武天皇天平元年をめて中宮を置踏歌を行ふと云ハ  
元三上ハ端午と云ハ嘉辰今月と云ハ未央ハ盛なりと云ハ  
帝王大臣家など御慶賀の時あゆむと云ハ何り學士等の

明永國字少







つ心ふもまさうたると餘情さうりかく  
感慨ふたに歌なるべしとぞ

いまこんといひかたりふせ月のまらちいでつるふま  
宗祇玄旨の説有明の月はまらち出る心一夜の義かわげれの失  
く月日成送行小秋之長月九月の空にわらゆるこも思  
入くわぢつるべし歌なる餘情ととどくる歌とぞ  
有明の月の在る夜明る十五日は過下弦の月と

無常

身は観すれが岸  
の類に根は離る  
草命は論ずもは  
江の邊に繫不船  
無常  
年年歳歳花  
相似る。歳歳年  
年人同く不

観身岸類離根草論命江邊不繫船  
身の危し岸類の根草のどく命の定るは江の羅刹  
船の繫るはと心細し身命のさるを云観つるべしとぞ  
年年歳歳花相似歳歳年年人不同  
花の色は年年變る人も人々歳々老去て易りゆきを云  
此詩唐詩選にも出唐詩遺響小鑑希夷が作りけるは希夷公

殺して子問我作と称  
まると云説あり信じ

蝸牛の角の上  
何事ぞ争石火  
の光の中此身  
寄

蝸牛角上争何事石火光中寄此身  
蝸牛はつむり角牛に似るゆへ右に莊子の角の二白  
小各々の国ありたふ觸氏右に蠻氏二国時々地を争て相闘ふ  
とある莊子が寓言かめとつむりかの角はたのむらひるはあつる  
ふとまににある国のいとも争はわぢたふさくとも也此世は命は  
果してかの角のあるはうひるはたどし夫れ何ぞ人々の心を争ふ  
そよ身のものるは石火の光の消安たよめたよ金は石は打  
火の出るこもは  
石火といひ

生者必滅釋尊未免梅檀之煙樂盡  
哀來天人猶逢五衰之日  
後江相公

生ある者ハ必滅す  
釋尊を未梅檀  
之煙は免未樂  
盡て哀來天人も  
猶五衰之日に逢

重明親王の北の方四十九日後江相公の書ける願文之經に  
夫生輒死とあるは生者必滅といひなり釈尊は鶴林小菰



朝の紅顔有て  
世路に嗚きも  
暮の白骨爲  
て郊原に朽

秋月波中の景  
観すも雖未春花  
夢裡の名残道  
未

時梅檀香燄焼火葬せし教主の如來も無常の如き  
云五義ハ天人五むむと云く佛氏の書に如彼切利天雖快  
樂无極臨命終時五義相現一頭上華鬘忽茶二天  
夜塵垢所着云頂中光滅三服下汗出四兩目數胸天人ハ  
世の五不樂本所居是相現時天女眷属皆悉遠離  
りり六波羅密經小出天人のたのまらざる真自道也云

朝有紅顔跨世路暮爲白骨朽郊原  
冷泉院の御時麗景殿の女御中陰の時作願文云義孝將  
若た時紅顔あつて世にをるも郊原の白骨とらる無常心

雖觀秋月波中影未遁春花夢裡名  
維摩經ハ此身如水中月とある故取莊子夢に  
蝶となりし意を以て此身ハ秋の月の波にやまら影の下  
て常住不變るざる故觀念をもとむる  
いま夢の世のつごもとてべとらる

世の中は何かなんぞやけこぼれおとの志は波は海は時  
拾遺

万葉集ハこぼれぬ舟の跡にたぐらとわり歌の心にあさ  
らへ惠心僧都和哥城狂言綺語をばいと嫌ハ惠心院ハ  
湖水小舟の行城んて少童子の此歌吟詠せし故聞こころハ  
仙道修行にもなるべら道とて二十八品の哥十樂の歌かや  
ふまはこころと元輔  
袋草紙ハこころ

末の梢の樹下ハサ一の遅速ありとも  
つごも消さし人への命はたとへ  
拾遺

詞に世中心細くも常なるぬらむハ公忠朝臣の  
ゆゑに世に消さし病重なるふらりとあり此哥よみ  
てやどくちありらると書きしあり  
歌のこぼれあさうらなり

白

白

闇夜に明月の地  
を行猶人間却白  
雲の天を踏

秦皇敬驚歎す燕  
丹之去日鳥頭  
漢帝傷嗟  
の頭漢帝傷嗟  
す燕武之來時  
の鶴の髪

銀河澄朗たり素  
秋の天又見林園  
白露の圓

毛寶が龜、寒  
浪の底に歸。王弘  
が使、晩花の前  
に立

闇夜猶行明月地、人間却踏白雲天

此句のたれをあり雪の景は作し闇の夜も明月の  
地は行どたれをいづくもいつくまで白雲の天の  
行く人間が天を踏く

秦皇驚歎、燕丹之去日、鳥頭漢帝傷

嗟、燕武之來時、鶴髪

秦皇敬驚歎す燕丹之去日鳥頭漢帝傷嗟の頭漢帝傷嗟す燕武之來時の鶴の髪  
白賊之燕の太子名丹秦の國に人質として在りて元より  
孝心の人なりしをわ時太子丹の國に飯て親仕はる心願する  
事此事故深き事にして秦皇情る人かてあざめて鳥の  
頭白くなり馬に角の生ん時汝汝免し歸んとすまらる太子  
天に仰ぎ歎いて云天我心汝察せよ地に俯して歎いて云地我  
心汝推せよとやがて白頭鳥飛來り秦皇の殿上にとまらり  
又額に角の生る馬宮中に走入り秦の始皇大に驚歎し  
丹はもろて飯り史記に出燕丹に至孝天地の感應を知らる

漢の昭帝、燕武が匈奴に在りて十九年、脚の辛苦  
毛髮鶴のごとく白くなりて歸來し、汝傷嗟す燕武と詠  
史の詩、雁の歌の紙に委まらば  
見合ふればなり

銀河澄朗、素秋、天又見林園、白露圓

白と云ふ題す四韻比入まり銀河の空に澄て白く順  
朗なるも秋は白色に配するも素秋と云林や園に圓く  
白く露も

毛寶、龜歸寒浪底、王弘使立晩花前

上の詩の胸句を蒙求に毛寶白龜とありある人江の辺が同  
白龜の甲長五六尺なるを毛寶と云毛寶字碩眞晋の世の  
人なりかの龜汝敗買取て江に放し其後石虎の仇二五騎  
と戦ひ毛寶が負て江に入り石虎踏心地とせやく岸に  
至しが産きて鎮まらば白龜とありなり晋書に出寒浪と  
作し浪も白に之陶晉字ハ淵明酒を嗜り九月九日に酒

試飲んとするにかりりる色バ東離のものとに款法擲てしすまらる  
処江州の刺史王弘使以酒賦贈其使白に衣法着しる  
正南史に出晚花ハおもたを分としふみ菊を云  
使も花も白に意法含くつり

蘆洲月色隨潮滿 蔥嶺雲膚與雪連

蘆洲の月の色は  
潮に隨て滿 蔥嶺  
の雲の膚ハ雪與  
連り

上の詩の腰句之蘆の生るる洲先の月の光も潮も  
滿るる白に意之蔥嶺ハ大雪山の北无独大池の南にあると西  
域記にまろり其山まろり高く常に雪消す又文選ハ依  
葱嶺ハ渭州にあり高山嶺の雪也雲ハ連と作雪も雪ハ白法云  
霜鶴沙鷗皆可愛 唯嫌年鬢漸皤然

霜鶴沙鷗皆可愛  
唯嫌年鬢漸皤然

上の詩の落句ハ通じて四韻律一章之白に鶴といはん 同  
とて霜の字法用沙も鷗ものまろり白しまろりたもの  
子法あげく是らハ皆愛一弄ハ我年老るる長鬢の漸ハ白  
まろり嫌ハ厭へるものハあると皤然ハまろりまろり  
まろりまろり夜の月影ハおもたを分としふみ菊を云

白に衣法着しる  
使も花も白に意法含くつり

和漢朗詠集抄卷之八 大尾

良言匯編

朗詠註本世并りその頗多(中)永注季抄最

畫より暗らく老人の詩天室遺氏の詠并年歴成

淡下此全部此中處々有之且詩歌作者名字位階

等の下此も半を願り我家大人葉山先生抄裏して葉宗

純更小一部抄抄作者姓名位階に引いて欠くは

既補之全八巻先生自筆して上本自云故人能

糟粕成四齋と少子聊言詠の新なる成識く巻末小述云

享和三癸亥

孟秋日

男 高伴恭



江戸町鑑

二冊

徳川御代所江戸町奉行御役所御用書并出立  
御用書并御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
江戸町御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
同町御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
各号御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書

大金子見前用集

横中 大要冊

世は御代御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書

御奉中女用文集

横中冊

世は御代御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書

裁絶子自

横中一冊

世は御代御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書

和漢朗詠園字抄

全二冊

世は御代御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書

大金高貴付来

全二冊 代三々

夫は御代御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書  
御役所御用書并御役所御用書并御役所御用書

